

市民の心意気で作った太陽光発電所

エネルギーの「地産地消」で地域農業活性化にも貢献

東日本大震災以降、クリーンな再生可能エネルギーへの関心はますます高まっています。今回は、市民の手で太陽光発電を実施した

安全なエネルギーを 自分たちで、と市民が出資

兵庫県宝塚市では、「自分たちのエネルギーは自分たちで考えよう」と2012年、有志の出資で「市民による手作り太陽光発電所」が誕生。翌年1月より運転を開始しました。

「苦労するのは、資金調達です」と語るのは、設置・運営を担う非営利型株式会社宝塚すみれ発電の代表取締役・井上保子さん。第1号設置時はNPOだったため銀行からの融資がかなわず、設置費用約30万円は私募債でまかなわれました。「出資者の多くは宝塚市



市民農園の上に太陽光パネルを設置した第4号発電所。



乳業会社の工場屋根に中古太陽光パネルを設置した、自家消費型の第5号発電所。



木下 斉 ■ 監修

まちびじネス投資家、事業家、内閣府地域活性化伝道師。全国各地で自ら投資家、経営者として事業の立ち上げ、運営に携わる一方、現場で得た知見を体系化し発信している。

民。『地域で安全なエネルギーを使いたい』との強い思いを感じました。これまでに6基の太陽光発電所を設置。資金の多くを分配型ファンドやクラウドファンディング、共感寄付^{※1}で調達し、「市民の発電」を実現しています。

「発電事業を通じて地域活性化にも貢献できれば」と井上さん。農地の上に太陽光パネルを設置し、農業と発電事業のコラボレーションで農業を支援する試みにも取り組んでいます。2020年に発送電分離が実施されれば、地域住民への直接売電も行いたいとのこと。エネルギーの地産地消が本格的に実現しそうです。「今後はバイオエネ発電^{※2}など地域の自然を活用する事業も」と抱負を語ります。

組み。

が共感選定した非営利活動に対し、市民から寄付金を集める取り組み。

エネルギーの使い方にも着目 地域の輪を活かし

近年、地域におけるエネルギー関連の取り組みは増加しています。住民を巻きこんで資金調達まで行い、6基の発電所を設置、運用している例はまれでしょう。

本事例のように、エネルギーを地域内で作り、使うのは理想形で、地域の輪が広がることで、今後は高断熱住宅開発など、エネルギーを使う側に着目した事業にも期待できそうです。地域住民を巻きこんでいる強みを活かし、使い方の変革まで手がければ、直売事業とともに大きく成長する可能性があります。自分たちの地域は自分たちで守る——エネルギーは、その重要な鍵となるでしょう。

本事業では、市民による出資に加えて、地元金融機関がさまざまな資金調達の相談に応じ、地域活性化を支援されています。

※2

兵庫県下の酪農事業者と連携し、家畜の排泄物を使ったバイオエネ発電を計画。